

五百五十句

高浜虚子

青空文庫

序

さきに『ホトトギス』五百号を記念するために改造社から『五百句』という書物を出した。これは私が俳句を作りはじめた明治二十四、五年頃（しごろ）から昭和十年までのの中から五百句を選んだものであった。先頃桜井書店から何か私の書物を出版したいとの事であったので、『ホトトギス』が五百五十号になった記念に、その後の私の句の中から五百五十句を選び出してそれを出版して見ようかと思ひ立った。思ひ立つてから大分日がたった。この月出ている『ホトトギス』は五百六十一号になっている。それはどうでも

いいとして、昭和十一年から昭和十五年まで約六年間の間に五百五十句を選んだのであるから、前の『五百句』の約四十五年の間の句の中から五百句を選んだのに比較して見て少し精粗の別がないでもないが、要するに記念のための出版であつて、その他の事は格別厳密に考える必要もないのである。『五百五十句』という書物の名にしたけれども五百七、八十句になつたかと思う。それも厳密に考える必要はないのである。

私は本年古稀こきである。おのずか自ら古稀の記念ともなつたわけである。

昭和十八年五月十九日

鎌倉草庵にて

高浜虚子

註 改造社発行拙著『五百句』の百六十一頁

「天の川」の句は取消す。

昭和十一年

鴨かもの中の一つの鴨を見てゐたり

一月二日 武蔵大沢浄光寺。
旭きよくせん川歓迎会。

枯れ果てしものの中なる
藤ふじ袴ばかま

一月四日 百花園偶会。水竹居、あふひ、花蓑、

実花。

物売も佇たたずむ人も神の春

一月五日 武蔵野探勝会。目黒不動、大国家。

枯荻かれおぎに添かひ立てば我幽かすかなり

一月八日 謡俳句会。百花園。

渋引きしごとのど喉強しかんげいこ寒稽古

一月十八日 谷中本行寺。やなかほんぎようじ播磨屋一門、はりまや水竹居、

たけし、立子、秀好。

ふるわたこき古綿子著のみ著のまゝ鹿島立かしまだち

二月十六日 楠窓なんそう東道の下に、章子を伴ひ渡仏

の途に上る。午後三時横浜かいらん解纜箱根丸にて。

我心春潮にありいざ行かむ

二月十九日 神戸碇泊ていはく。花隈、吟松亭、関西同
人句会に列席。

日本にっぽんを去るにのぞみて梅十句

二月二十一日 朝、門司著。萍子招宴、三宜楼。

上^{シャン}海^{ハイ}の震^{みぞ}るゝ波止場後にせり

二月二十六日 箱根丸船中。

春潮や窓一杯のローリング

二月二十九日 朝、香港^{ホンコン}出帆。

顔しかめ居る印度人町暑し

著飾りて馬來女の跣足かな

裸なる印度ますらを幸きくあれ

晚涼や火焰樹並木斯くは行く

三月四日 新嘉坡著。石田敬二、東森たつを来

訪。次で三井物産支店長松本季三志夫妻、三菱商
 事支店長山口勝、宮地秀雄等来船。敬二東道の下
 に章子を帯同、一路自動車にて奥田彩坡さいは経営の士セ
 乃ナイの護謨園ゴムを訪ふ。横光利よこみつりいち一同道。帰途タンジ
 ヨン・カトンの玉川ガーデン、敬二居等に立寄り、
 今日の吟行地植物園に下車。それより空葉居に一
 憩、新喜楽にて晩餐ばんさん。俳句会。

稲妻のするスマトラを左舷さげんに見

三月五日 新嘉坡碇泊。日本人共同墓地にふたばて二葉亭いしめい四迷の墓を弔ふ。敬二、楠窓同道。章子は途中空葉居に下車。帰途敬二居に立寄り帰船。正午出帆。

稲田ありどあり日本に似たるかな

三月六日 彼南ペナン著、上陸。

月も無く沙漠暮れ行く心こころ細ほそ

三月二十一日 午後三時、スエズ蘇士入港。陸路カイロ
に到りメトロポリタン・ホテル一泊。

宝石の大塊のごと春の雲

四月十九日 箱根丸にて楠窓、友次郎と協議の末、
米国經由帰朝のことを断念。午後、松岡夫妻、楠
窓、町田一等機関士、章子、友次郎等とサンフリ

ト村に花畑見物。

舟橋を渡れば梨花りかのコブレンツ

兩岸の梨花にラインの渡し舟

梨花村の直ぐ上にあり雪の山

四月二十一日　ライン河。

木々の芽や素すじゆう十住みけん家はどこ

四月二十一日 シュロツス・ホテル、バルコニー
よりハイデルベルヒの町を望む。

望ぼうろう楼ろうある山の上まで耕され

四月二十二日 午後一時五分発、車中雑詠選に没
頭。夜、伯ベルリン林著。三菱商事藤室益三夫妻に迎へ

られ大和旅館に入る。沿道触目。

夜話^{やわつい}遂に句会となりぬりラの花

四月二十四日 藤室夫人東道、日本人の学校參觀、講演。「あけぼの」にて昼食。それよりオリムピック敷地一見。カー・デー・バー百貨店に立寄り帰宿。大毎社員加藤三之雄来訪。夜、三菱商事支店長渡辺寿郎邸にて晚餐会。井上代理大使夫妻、孫田日本学会主事、藤室夫妻等と小句会。

春風や柱像屋根を支^{ささ}へたる

四月二十六日 渡辺夫人、藤室夫妻東道、ポツダ
ムに赴く。^{あたか}恰も日曜日。ポツダム宮殿。

箸^{はし}で食ふ花の弁当来て見よや

四月二十六日 更に桜の名所ヴェルダーに車を駆

る。藤室夫人携ふるところの日本弁当を食ふ。群衆怪しみ見る。

国境の駅の両替ちじつ遅日かな

四月二十七日 藤室夫妻と再び日本人学校に赴き、日本人会にて昼食。午後一時五十分伊藤夫妻、迪子、バーミング、ビュルガ姉妹、京極、篠原、高田、寺井、昌谷、世良、仙石に送られツオ駅発、独蘭国境に向ふ。

倫ロンドン敦の春草を踏む我が草履ぞうり

四月二十八日 朝七時前ハーウツチ港著。それより汽車にてリバプール・スツリート・ステーション著。上ノ畑楠窓、八田一朗、松本覚人、榎原覚、河西満薫、有ありよし吉義弥、高橋長春、常盤の主人岩崎盛太郎の出迎を受く。それより覚人君嚮きょうどう導の下に楠窓、一朗両君と倫敦市中一見、デンマーク街の常盤本店にて休息。タフネルパークロード

の常盤別館に入る。駒井権之助、朝日新聞社古垣
鉄郎氏来訪。晚餐を待つ間小句会。

名を書くや春の野茶屋の記名帳

四月三十日 覚人東道、沙翁さおうの誕生地ストラット
フォードに向ふ。楠窓、一朗、友次郎、章子同行。

春の寺パイプオルガン鳴り渡る

四月三十日 シェクスピア菩提寺^{ほだいじ}。

売家を買はんかと思ふ春の旅

四月三十日 三時頃シェクスピア菩提寺より帰途
に就く。

あしなえ
躰の妻を車に花に曳^ひく

日本にっぽんの花の提灯ちようちんともるもと

五月二日 キューガーデン吟行。同行者八田一朗、
 十時とどき春雄、伊藤東籬とうり、有吉ありよし瓦楼がろう、森脇じようじ襄治、
 大林、古垣鉄郎、池田徳真、槇原夫人、保柳夫人、
 小野龍人、保柳才喜、小野静女、友次郎、章子。
 夕刻日本人会に戻り食後披講。

五月六日 朝九時、川村、伊藤、松本、河西夫人、

八田、岩崎に見送られヴイクトリア・ステーション発、正午頃ドーヴァー駅著。英吉利船にて海峡を渡り午後一時半頃仏蘭西のカレー駅より乗車、五時頃巴里著。上野に迎へられ直ちにマゼスチック・ホテルに入る。アルフレッド・スムーラを帯同して松尾邦之助来訪、うち連れて佐藤醇造を誘ひヂュリアン・ヴオカンス訪問。晚餐。席にアルベール・ポンザンありて一同と共に仏蘭西のはいかい談に花を咲かせ記念撮影。ヴオカンス邸即興。

ハンカチの蝶と細りて尚なほ振れる

五月八日 午前十時、馬耳塞マルセイユ著。郵船会社に立
 寄り箱根丸乗船。山下馬耳塞領事来船。四時出帆。
 友次郎は山下領事等と共に波止場に立ち長く見送
 る。港内にて清三郎乗船の筥崎丸はこぎきまると行違ふ。

紅海に船早はや浮ぶ帰帆と疾し

五月十四日 スエズ運河通過、紅海に入る。

熱帯の海は日を呑み終りたる

この暑さ火夫や狂はん船やとまらん

五月十七日 紅海航行。暑さいよく劇し。

スコールの波窪^{くぼ}まして進み来る

五月二十一日 初めてスコールに遇ふ。

亘^{わた}りたるリオ群島は屏風^{びょうぶ}なす

鰐^{わに}の居る夕汐^{ゆうしお}みちぬ椰子^{やし}の浜

扇風機まはり熱風吹き起る

五月三十日 朝、新嘉坡入港。奥田彩坡、古根勲、
森野熹由、山口勝、宮地義雄、志村空葉夫妻、玉

木北浪来船。玉川園に行き日本人会に於ける俳句会に赴き、転じて森野の招宴に列し再び日本人会に赴く。深更帰船。

上^{シヤンハイ}海^{ハイ}の梅雨^{なつか}懐しく上陸す

六月八日 朝七時、上海著。堀場定祥、大内魯水、下村非文、星野露頭仏、中田秋平、中原大鳥来船。上陸、南市の半^{ブーソンユ}淞園に行きそれより三菱商事の招宴にて月廼家にて田中三菱商事支店長等と会食。

午後五時、閘北の新月花壇のすみれ会に列席。一時から三菱銀行上海支店の竹内良男の説明にて、フランス租界八仙橋の黄金大戲場に支那芝居を觀_みる。

船涼し左右_{そう}に迎ふる対馬壱岐_{つしまいき}

六月十日 雜詠選了。対馬見え壱岐見え来る。大阪朝日九州支社より、帰朝最初の一句を送れとの電報あり。

戻り来て瀬戸の夏海絵の如し

六月十一日 朝六時甲板に立出で楠窓と共に朝あさも
 靄や深く罩こめたる郷里松山近くの島山を指さし語
 る。

夏潮を蹶けつて戻りて陸くがに立つ

六月十一日 神戸入港。名古屋の丹治蕪人、加藤霞村、加藤了谷。高松の村尾公羽、安藤老路。京都の松尾いはほ、平尾春雷、田中八重、田畑三千女、其他京阪神の諸君五、六十名の出迎を受く。

蘆屋のとしを居に赴き晚餐。旭川、泊月に続いて『猿蓑』さるみの輪講のため三重史、大馬、涙雨、九茂茅、蘇城来り小句会。それより輪講に加はり午前一時頃帰船。

濁り鮎腹ぶなをかへして沈みけり

蠅はえよけもかぶせて猫は猫板に

六月十九日 家庭俳句会。発行所隣室にて。

朝顔の苗なだれ出しふごし畚ふごのふち

六月二十二日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

籐椅子とういすにあれば草木花鳥来ら

我が前わに夏木夏草動き来る

七月十八日

風生招宴。

麴町こうじまち

永田町、
逵信次

官官邸。

月青くかゝる極暑ごくしよの夜の町

七月十九日

発行所例会。

丸ビル集会室。

航海やよるひるとなき雲の峰

七月二十六日 大阪玉藻会投句。

眉目みめよしといふにあらねど紺浴衣こんゆかた

八月七日 家庭俳句会。
愛宕山あたごやま、茶店。

麻の中雨すいくと見ゆるかな

八月十四日 草樹会。丸ビル集会室。

秋の浪蹶けた立たて帰りし船ぞこれ

八月十八日 神戸にて友次郎帰朝を迎ふ。

宮様の今御成おなりとや扇置く

八月十九日 甲子園朝日新聞社席に全国中等学校
野球仕合を見る。

俳諧の忌日きじつは多し萩の露

八月二十日 新大阪ホテルに在り。
旭きよくせん川邸、
元忌出句。はじめ

はる／＼と人訪ふ約や月の秋

八月二十日 神戸駅前相あいおい生町、三ツ輪亭南店に
牛鍋をつゝき、それより泊月、鍋平朝臣、年尾としお、
立子、友次郎と共に岡山に矢野蓬矢ほうしを訪ふ。

秋の風衣と膚吹はだえき分つ

八月三十日 家庭俳句会。深沢、水竹居邸。七夕

祭。

藻もの水に手をひたし見る沼の情

九月六日 武蔵野探勝会。成田山吟行、
印旛沼いんばぬま
を舟にて渡る。

一夜明けてたちま忽ち秋の扇かな

よく見たる秋の扇のまづしき絵

庭石に蚊遣置かしめ端居かな
かやり
はしい

つくばひに廻り燈籠の灯影かな
まわ
どうろ
ほかげ

九月九日 水竹居招宴。越央子貴族院議員就任祝
 賀会。きん楽。

命かけて芋虫憎む女かな

九月十一日 草樹会。丸ビル集会室。

秋あきあわせ 裕あ身を引締めて稽古事けいここと

九月十四日 笹鳴会。丸ビル集会室。

目さむれば貴船きふねの芒生すすきけてありぬ

九月十七日 京都一泊。

必ずしも鯨はぜを釣らんとにはあらず

九月二十七日 水竹居招宴。永田青嵐主賓。築地つきじ
 きん楽。

欄干によりて無月の隅田川すみだがわ

十月一日 偶成ぐうせい。

我が息を吹きとゞめたる野のわき分かな

飛んで来る物恐ろしき野分かな

十月三日 二百二十日会。清水谷公園、皆香園。

芭蕉忌や遠く宗祇そうぎさかのぼに溯る

十月十二日 笹鳴会。丸ビル集会室。

椀^{わん}ほどの竹生島^{ちくぶしま}見え秋日和^{あきびより}

茸^{たけやま}山の少し曇れば物淋^{ものさび}し

十月十五日 つるばみ会主催、近江国志賀郡真野
 村曼陀羅^{まんだら}山松茸狩。年尾、友次郎、王城、いはほ
 等と共に。

翡翠かわせみの紅一点につゞまりぬ

十月十五日 大津紅葉館別館にて晚餐。

帚ほうきあり即すなわちとつて落葉掃く

十月十六日 関西同人会。阪急沿線會根、星ヶ岡
茶寮。

秋の水木曾川といふな名にしお負ふ

十月十八日 名古屋牡丹会大会吟行。日本ライン
遊園地に向ふ。

きのこ菌など やまごち山 幸よ多きき台所

掛かけ稲いねに山又山の飛ひ驒だ路じかな

十月十九日 遠藤葦城東道。昨夜は飛驒下呂温泉、
湯の島旅館宿泊。今朝高山に行く。角正にて精進
料理。

げてもものは嫌きらひで飛驒の秋は好き

十月十九日 げてもものは白川郷しらかわごうが本場なりとの
こと、げてももの展覧会場あり。

今の世も月明あきらかに百年忌

十月二十四日

池上いけがみ本門寺ほんもんじ。

三世中村歌右衛

門建碑式。歌右衛門肖像画に賛。

叡山えいざんの秋深かりし思ひ出で

十一月一日

往年横川よかわ中堂にてはじめて渋谷慈鑑じがい

に邂逅かいこう。今は京の真如堂の住職。その還暦祝に

句を徴されて。

手をたゝき婢ひを呼びづめや風邪かぜの妻

十一月九日 大崎会。丸ビル集会室。

御神おみくじ鬮の凶が出でたる落葉降る

十一月二十一日 木の芽会。
鬼子きしぼじん母神境内。吉右

衛門邸にて披講。

人に恥はぢ神には恥ぢず
初はつもうで詣

神は唯みそなわ巒すのみ初詣

推し量る神慮かしこし初詣

十二月七日 偶成。

雪の暮茶の時ときより頼つねよに句の常世

十二月十日 大正五、六年頃か、鎌倉能楽堂にて

「鉢はちのき木」を演ぜし時川越守男ワキを勤めくれた

り。其後茶掛ちやがけに句を所望せられたるに書きたる

句を打ち忘れ居たるを近藤いぬる先頃川越の茶会
に招かれ其軸を示されたるを覚え来れりとして教へ
くれたるもの。川越は久田家の茶の宗匠なり。

焚火消え一夜の宿の主なしたきび あるじ

十二月十一日 柚木湘水追悼句。嘗て湘水亭に
一泊せしことあり。

枯芭蕉棒もたしかけありにけり

十二月十一日 草樹会。丸ビル集会室。

羽子板を咬^くへ去る犬別荘へ

十二月二十五日

鎌倉俳句会。

大仏境内、南浦園。

昭和十二年

日ねもすの風かざはな花淋しからざるや

一月二日 武蔵野探勝会新潟行。篠田旅館泊。み
づほ、素十等の歓迎を受く。

春著はるぎの妓右この袂たもとに左の手

一月四日 二百二十日会。きん楽。

七草に更に嫁菜よめなを加へけり

一月七日 川崎利吉息安雄結婚披露。

加留多カルタとる皆美しく負けまじく

双六すいろくに負けおとなしく美しく

一月八日 草樹会。丸ビル集会室。

太陽を礼讃らいさんしてぞ日向ひなたぼこ

倫敦ロンドンの濃霧の話日向ぼこ

伊太利イタリアの太陽の唄うた日向ぼこ

一月十一日 友次郎と共に鎌倉駅にて電車を待つ

間偶成。

画家去りぬ 媯^{えんぜん}然^{ぜん}として梅の花

一月十五日 家庭俳句会。小石川植物園。

マスクして我^{なんじ}と汝^{なんじ}でありしかな

一月二十三日 青^{せい}邨^{そん}送別を兼ね在京同人会。向^む

こうじま
島 弘福寺。

羽ひらきたるまゝ流れ
寒かんがらす鴉

鳴くたびに枝踏みゆるゝ寒鴉

一月二十五日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

化粧して気分すぐれず春の風邪

一月二十八日 丸之内倶楽部俳句会。

そのまゝに君紅梅の下に立て

一月三十一日 深沢、水竹居邸。青邨送別会。実
花あり。

客ありて梅の軒端のきばの茶の煙

二月七日 武蔵野探勝会。
相州下曾我梅林。加来
金升邸。

御^{おたま}霊^ま屋^やに
枝^{しだれ}垂^{うめ}梅^めあり君知るや

二月十九日 家庭俳句会。
芝公園蓮池。

かりそめの情は^{あだ}仇よ春寒し

二月二十一日 発行所例会。丸ビル集会室。

雛^{ひな}の顔鼻無きがごとつるくと

三月五日 家庭俳句会。渋谷桜ヶ丘、遠藤葦城邸。

折りく^なて尚^お花多き宮椿

三月七日 武蔵野探勝会。武州大沢梅林。

一枚の葉の凜^{りん}として挿木^{さしき}かな

三月八日 大崎会。丸ビル集会室。

雨晴れておほどかなるや春の空

三月十四日 謡句会。

たとふれば独こま樂のはぢける如くなり

三月二十日 『日本及日本人』 碧梧桐追悼号。 碧
梧桐とはよく親しみよく争ひたり。

婢ひげぼく下僕走り出迎へ花の荘

四月二日 家庭俳句会。 葉山、平、畠山別邸。

別荘を出て別荘へ花の坂

幹太く大いなるかな家いえさくら桜

四月八日 七宝会。大磯、高木別邸。

花の如く月の如くにもてなさん

四月九日 田中家新築披露扇の句。女将に代りて。

畦^{あぜ}を塗る鋤^{くわ}の光をかへしつゝ

畦塗るや首をかしげて懇^{ねんごろ}に

四月十二日 大崎会。丸ビル集会室。

さま／＼の情のもつれ暮の春

四月十八日 発行所例会。

折ふたの蓋取ればお圧されて 柏かしわもち餅

四月二十三日 鎌倉俳句会。 葉山、水竹居山荘。

熊くま蜂ばちのうなり飛び去る棒のごと

四月二十六日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

馬酔木折つて髪かざに翳かげせば昔めき

重の内あたたか暖かにして柏餅

五月六日 二百二十日会。銀座六丁目、実花宅。

目立たぬや同じ色なる更ころもがえ衣

五月十日 笹鳴会。丸ビル集会室。

麦の穂の出揃でそろふ頃のすがくし

五月十三日 七宝会。武蔵境むさしきかい、望田邸。

鯖さばの旬しゆん即ちこれを食ひにけり

五月十四日 草樹会。丸ビル集会室。

此宿はのぞく日にちりん輪さへもか黷び

えにしだの黄色は雨もさまし得ず

五月十六日 発行所例会。丸ビル集会室。

たゝみ来る浮葉うきはの波のたえまなく

五月二十一日 家庭俳句会。水竹居祝賀。不忍池
畔雨月荘。

時ときじくぞ雨は降りける 更ころもがえ衣え

五月二十四日 「玉藻十句集（第四回）」

老い人や夏木見上げてやすらかに

六月五日 水竹居祝賀会。築地、きん楽。

藻の花や母娘おやこが乗りし沼渡舟ぬまわたし

六月六日 武蔵野探勝会。

我孫子あびこ、谷口別邸。

桑の実や父を従へ村娘

六月十一日 草樹会。丸ビル集会室。

見るうちに薔薇^{ばら}たわくと散り積る

六月十四日 大崎会。丸ビル集会室。

急^{いそ}がしく煽^{あお}ぐ団扇^{うちわ}の紅は浮く

六月十七日 白草居自祝招待会。とんぼ。

昂こうぜん然ぜんと泰たいさん山さん木ぼくの花に立つ

六月十九日 白草居退職祝賀会。日比谷松本楼。

玉虫の光を引ききて飛びにけり

六月二十日 発行所例会。丸ビル集会室。

料理屑くず流れ行くあり船料理

六月二十四日 丸之内倶楽部俳句会。

三等待まちあい合あ昼寝の男起き上り

七月三日 家庭俳句会。東京駅附近写生。発行所
にて披講。

親竹に若竹添へて三幹竹

七月三日 『山彦』五周年記念句会。三信ビル。

ユーカリを仰げば夏の日かす幽か

七月十一日 二百二十日会。鎌倉、
瑞泉寺ずいせんじ。

引いて来^きし夜店車をまだ解かず

七月十四日 銀座探勝会。松屋裏、観音堂。

這^はひよれる子に肌脱^{はだぬ}ぎの乳房^{ちぶさ}あり

肌ぬぎし如く衣紋^{えもん}をいなしをり

七月十八日 発行所例会。丸ビル集会室。

へこみたる腹に臍へそあり 水みず中あたり

七月二十二日 丸之内倶楽部俳句会。

月あれば夜よを遊びける世を思ふ

七月二十四日 夜、偶成。

颪たいふう風なごりの名残しゅううの驟雨あまたあまたゝび

七月二十六日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

大敷おおしきの網あみに夏海なつうみ大うねり

泳およぎ子の潮うしほたれながら物もの捜さがす

釣堀つりぼりの日蔽ひおひの下の潮青うしほし

八月一日 武蔵野探勝会。真まなづる鶴、日本水産会社
 大敷網。

避暑の浜や稍やさびれたる花火かな

八月八日 五月雨会。水神八百松。

夏山やよく雲かゝりよく晴るゝ

八月二十五日 箱根町、箱根ホテル。

松かつおぶね魚舟 子供上りの漁夫もゐる

九月五日 武蔵野探勝会。芝区海岸通り、日本水産株式会社冷凍部芝浦工場。

屋根裏の窓の女や秋の雨

九月十日 銀座探勝会。
こびきちよう木挽町三丁目河岸、朝
 日倶楽部。

稲妻をふみてはだし跣足の女かな

九月十一日 二百二十日会。丸ビル集会室。

子の忌日きじつ妻の忌日ほこも戈の秋

九月十九日 大連だいらんの吉田弧岳、亡妻三周年の忌
 日も内地に帰れず事變たの為め足留めをくひ居れり、
 亡長男の七周年忌日が丁度子規忌当日なりと申越
 しければ。

聳そびえたるお西お東月の屋根

九月二十七日 「玉藻十句集（第八回）」

此谷を一人守れる案山かがし子かな

十月十一日 笹鳴会。丸ビル集会室。

力なく毛見けみのすみたる田を眺ながめ

十月十一日 大崎会。丸ビル集会室。

老人と子供と多し秋祭

十月十五日 家庭俳句会。
氷川^{ひかわ}神社、あふひ居。

落花生喰^くひつゝ読^くむや罪と罰

十月十六日 発行所例会。
丸ビル集会室。

実をつけてかなしき^{ほど}程の^{おくさ}小草かな

十月二十七日 「玉藻十句集（第九回）」

目つむれば今日の錦にしぎの野山かな

十月三十一日 阪神線甲陽園播半。ましこ招宴。

智照尼は昔知る人薄うすもみじ紅葉

今も亦またひとしぐれ一時雨あり薄紅葉

十一月三日 京都牧野滞在。光悦寺に行き、
寺を訪ひ嵐山に遊ぶ。 祇王

月の子はかぐや姫にはあらざりき

十一月八日 旭川きよくせんより桜坡子はじめて男子を
得しとのこと言ひ来る。返事に、序ついであれば桜坡子
に言づてよとて。

秋天に赤き筋ある如くなり

秋空や玉の如くに揺曳ようえいす

十一月十日 銀座探勝会。松屋裏尼寺。

静さに耐へずして降る落葉かな

十一月十四日 臨時句謡会。あふひ邸。

佇たたずめる人に菊花のうつ伏せり

人去りて冷たき石に倚よれる菊

十一月十九日

家庭俳句会。

柚男そまお山荘。

酔よひたはれ握る冷たき老の手よ

身の上に法冷ひややかに来りけり

十一月二十二日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

一足の石の高きに登りけり

十一月二十四日 二百二十日会。鎌倉山、千穂山
 荘。

柴漬ふしづけの悲しき小魚こうおばかりかな

雑炊ぞうじや後生ごしょうだいじ大事だいじといふことを

十一月二十五日 丸之内倶楽部俳句会。

枯るゝ庭にわものの草紙そうしにあるがごと

黒くろきしみつとあり五郎兵衛柿ごろうべえがきとかや

此庭も夫唱婦隨の枯るゝまゝ

十一月三十日 風生居招宴。

鼻の上に落葉をのせて緋鯉ひごい浮く

落葉敷く荒波を敷く如くなり

十二月二日 家庭俳句会。植物園写生、椎花邸招宴。

牛立ちて二三歩あるく短き日

十二月五日 武蔵野探勝会。横浜在子安、こやす子安農園。

鉄板を踏めば叫ぶや冬の溝みぞ

十二月八日 銀座探勝会。松屋裏、尼寺。

砲火そゝぐ南京ナンキン城は炉の如し

かゝる夜よも将士の征衣霜深し

寒紅梅ふくいく馥郁いくとして招魂社

十二月九日 東京朝日新聞社より南京陥落の句を
徴されて。

女を見連れつの男を見てしわす師走

十二月十一日 二百二十日会。松坂屋写生、実花
居。

我生や今日の短き日も惜しゝ

十二月十三日 夜。大崎会。丸ビル集会室。

首巻もせよ祝つても貰もらふべし

十二月十五日 風早浦の人還曆祝の句を認したたむとて。

話のせて車まつしぐら暮の町

十二月十七日 家庭俳句会。あふひ邸。

かる／＼と上る目出度し餅の杵めでた きね

十二月十八日 発行所例会。丸ビル集会室。

冬ふゆ日ひ柔やわか冬木柔いすか何れぞや

冬木中生徒の列の現れ来く

十二月二十二日 『立子句集』出版記念会。上野

公園梅川。

寒雨降りそゞげる中の枝垂梅しだれうめ

冬麗うらら花は無けれど枝垂梅

十二月二十四日

鎌倉俳句会。

要かなめ山やま、香風園。

行年ゆくとしや歴史の中に今我われあり

十二月二十五日 句謡会。向島百花園、千歳。

昭和十三年

初句会浮世話をするよりも

一月一日 旭川、年尾、友次郎と共に初句会。

肃々と群聚はすゝむ 初詣はつもうで

清浄しようじようの空や一羽の寒鴉かんがらす

一月二日 武蔵野探勝会。明治神宮初詣。日本青
年館。

棲^{つま}とりて独^{ひと}り静^{しずか}に羽^は子^ねをつく

一月三日 向島弘福寺。旭川、秋琴女歓迎。

焚^{たき}火^びかなし消えんとすれば育てられ

追羽子おいばねのいづれも上手じょうず姉妹

一月七日 家庭俳句会。百花園、千歳。

せはしなく暮れ行く老の短き日

一月八日 二百二十日会。木挽町、田中家。

爛々らんらんと暁あけの明星うきねどり浮寝鳥

一月十日 夜。大崎会。丸ビル集会室。

水餅みずもちの壺つぼの蓋ふたとる窓明り

一月十四日 草樹会。丸ビル集会室。

寒肥かんごえを皆やりにけり梅桜

春しゅんすい 水すい や子を抛ほうる真似まねしては止やめ

一月二十一日 家庭俳句会。日比谷公園。

人形くずの前に崩くずれぬ寒かん牡丹ぼたん

何事の頼たのみなければど春はるを待まちつ

一月二十四日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

床とこの花すで已すでに古ふるびや松まつの内うち

一月二十七日

「玉藻十句集（第十二回）」

畦あぜ一ひとつ飛とび越こえ羽は搏はつ寒か鴉あ

凍こ鶴つるの首くびを伸のして丈たけ高たかき

一月二十七日 丸之内俱樂部俳句会。

焚火してくれ^{なさけ}る情に当りもし

一月三十日 句謡会。百花園、千歳。

旗のごとなびく冬日をふと見たり

二月四日 家庭俳句会。小石川植物園。

小ぎつぱりしたる身なりや
針納はりおさめ

町娘え笑みかはし行く針供養

二月七日 二百二十日会。白山招宴。銀茶寮。

病にも色あらば黄や春の風邪

二月十二日 草樹会。丸ビル集会室。

猫柳又現はれしぎよおう漁翁かな

二月十四日 笹鳴会。丸ビル集会室。

しゅんしやう春宵をあだに過ぎなばく悔あらん

二月十五日 奈王招宴。新橋なだまん灘万。

猫柳ほゝけし上にかゝれる日

うしほ今和布めひんがしを東に流しをり

潮の中和布を刈る鎌の行くが見ゆ

二月十九日 発行所例会。丸ビル集会室。

提ちようちん灯の照らせる空や夜の梅

二月二十日 鳴雪十三回忌を修す。丸之内倶楽部
日本間。

橋に立てば春水我に向つて来

三月六日 武蔵野探勝会。和田堀、明治大学、本願寺墓地等。

煎いつてゐる雛ひなのあられの花咲きつ

遠とほざけて引寄せもする春火桶はるひおけ

三月七日 二百二十日会。銀座五丁目東仲通、菊
の家。

啓けいちつ蟄ちつや日はふりそゞぐ矢の如く

三月十一日 草樹会。丸ビル集会室。

桜貝波にもものいひ拾ひ居る

朧おぼろよ夜や男女行きかひくくて

三月二十四日 丸之内倶楽部俳句会。

竹林に黄なる春日はるひを仰ぎけり

藁屋根に春空青くそひ下る

三月二十五日

鎌倉俳句会。

名越、

立正安国論寺。

鬱々うつうつ

と花暗く人病みにけり

四月三日

武蔵野探勝会。

神代村、

深大寺。

彼の女春日まぶしく瞬けり
か はるひ またた

四月四日 二百二十日会。深沢、水竹居邸。

肴さかなくまないた 屑俎くずにあり花の宿

語り伝へ謡ひ伝へて梅若忌
うめわかき

忌日きじつあり碑あり梅若物語

四月十一日 大崎会。富士見町、三輪女邸。

垣^{かきそと}外の暮春の道の小さくよ

四月二十一日 鎌倉俳句会。山の内、浄智寺。

遠足の野路の子供の列途^{とぎ}切れ

四月二十五日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

手を上げて別るゝ時の春の月

四月二十八日

「玉藻十句集（第十五回）」

杉落葉して境内の広さかな

四月二十八日

丸之内倶楽部俳句会。

はるたけなわ
春 闌 暑しといふは勿体なし

五月一日 武蔵野探勝会。 小石川後楽園、
亭。 涵徳。

分け行けば躑躅つつじの花粉袖そでにあり

五月六日 家庭俳句会。 駒込こまごめ、 六義園りくぎえん。

夏なつ暖のれん簾垂れれて静しずかに紋もんどころ所ところ

五月十三日 銀座探勝会。松屋七階貴賓室。

バスたなの棚たなの夏帽おちのよく落おちること

五月十七日 佐渡に一遊。

校服の少女しょうじょ汗くさく活澆かっぱつに

六月三日 家庭俳句会。日比谷公園。

鶉うの森のあはれにも亦また騒さわがしく

六月五日 武蔵野探勝会。千葉在大巖寺、鶉の森。

新しき蚊帳板かやのごと釣つられけり

六月十日 草樹会。丸ビル集会室。

梅雨傘をさげて丸ビル通り抜け

六月十七日 家庭俳句会。丸ビル写生。

欄干に江山こうざん低しのみ蚤ふるふ

六月十八日 発行所例会。丸ビル集会室。

休んだり休まなんだり梅雨工事

六月二十日 田中家招宴。

我^{わが}思^{おも}ふまゝに^{ほうから}子^こ子^こうき沈^{しづ}み

六月二十三日 丸之内倶楽部俳句会。

箱庭の月日あり世の月日なし

己おのが羽はねの抜けしを啣くわへ羽はね拔ぬけどり鳥

六月二十四日 鎌倉俳句会。 深沢村、寺分、陣出
園温泉宿。

聞えざる涼み芝居ただを唯見ただをり

七月四日 二百二十日会。浅草仲見世、万屋。女
 劍劇大江美智子一座。

桃葉湯丁稚つれたる御寮人
とうようとうでつち
 ごりようにな

滴したたりの岩屋の仏花奉る

七月八日 草樹会。丸ビル集会室。

句拾ふや芒すすきさゝやき露語る

葦しべの朱が花卉にしみて孔雀くじやくそう草

虻あぶと蝶向合ひすがる九階くがいそう草

七月九日 句謡会。百花園、千歳。

雑沓ざつとうの中に草市立つらしき

七月十二日 銀座探勝会。東海堂屋上、朝顔を見る。ついで東海堂主人の本宅に招ぜらる。

泣きじやくりして髪洗ふ娘かな

喜びにつけ憂うきにつけ髪洗ふ

七月二十五日 玉藻俳句会。丸ビル集会室。

端居はしいして垣とのもの外面とのもの世を見居る

七月二十七日 「玉藻十句集（第十八回）」

晚涼や謡の会も番すゝみ

八月二十一日 あるじ慰問、句謡会。本田あふひ
邸。

破れ傘やぶがささして遊ぶ子秋の雨

病人に野分のわきの夜を守りけり

九月一日 家庭俳句会。あふひ居。

棟並なめて早稲田大学秋の空

九月七日 七宝会。小石川高田豊川町、田原久吉

邸。

友を葬る老の残暑の汗を見る

面おもやつれしてかつくと夜食おもかな

九月九日 草樹会。丸ビル集会室。

夜半よわに起き娘こが宿を訪とふ野分なかな

九月十二日 笹鳴会。丸ビル集会室。

紫蘇しその実を鋏はさみの鈴の鳴りて摘む

九月十六日 家庭俳句会。あふひ邸。

砧きぬた盤ばんあり差さし出いだす灯の下に

山河こゝに集り来り下り築あつまきた
やな

九月二十二日 丸之内倶楽部俳句会。

秋風や心の中の幾山河

九月二十九日 「玉藻十句集（第二十回）」

一面に月の江口えぐちの舞台かな

目まのあたり月の遊女の船遊び

十月二日 武蔵野探勝会。
かねすけ兼資の「江口」を観る。
ほうしやう宝生 能楽堂に野口

もの置けばそこに生れぬ秋の蔭

十月三日 二百二十日会。木挽町、田中家。

何^{なに}某^{がし}に扮^{ふん}して月に歩^あきををり

すべから
須^すく月の一句^{いちご}の主^{あるじ}たれ

十月八日 観月句会。大船、松竹撮影所。

嗜^{たし}まねど温^{あたた}め酒^{さけ}はよき名^ななり

十月十日 夜。大崎会。丸ビル集会室。

夕闇ゆうやみの蘆荻ろてき音なく舟つ著つきぬ

十月十五日 発行所例会。丸ビル集会室。

肌はださむ寒さむも残のこる寒さむさも身一つ

十月二十日 一行の中に年尾りつりも加はり、高松りつり栗
林公園内、掬きくげつ月亭俳句会。此夜高松古新町か

しく泊。普通寺に正一郎伍長を訪ふ。

歴史悲し聞いては忘る老の秋

十月二十一日 屋島に遊ぶ。

病床の人訪ふたびに秋深し

十月二十五日 家庭俳句会。あふひ居。

並び陥つ 広東武漢秋二つ

よろこ^よおの^おの^の
悦びに戦く老の温め酒

十月二十五日 東京朝日新聞より需めらるゝまゝ
に武漢陥落を祝す句のうち。

真東に向はしめたる像の秋

これよりや時雨しぐれ落葉と忙がしき

十一月三日 武蔵調布上布ふだ田三〇四、新田霞霧園
隣地、虚子胸像除幕式。

つやゝかな竹の床しょうぎ几を菊に置く

十一月六日 武蔵野探勝会。
小金井こがねい、大正園。

我われ静ずなれば蜻蛉とんぼ来てとまる

十一月七日 二百二十日会。清水谷公園、皆香園。

凍いて蝶ちようの眉まゆ高々とあはれなり

十一月十四日 笹鳴会。丸ビル集会室。

手拭てぬぐいにうち払ひつゝ夕時雨

十一月二十六日

「玉藻十句集（第二十二回）」

焚火たきびそだてながら心は人を追ふ

右手めでは勇ゆんで左手は仁や 懐ふところ手

十一月二十八日

玉藻俳句会。丸ビル集会室。

大枯木己が落葉を慕ひ立つ

十一月三十日 比古、立子、ていじよ汀女、香雲と共に

小石川植物園。

焚火そだてゐたりしが立ち歩み去る

十二月二日 家庭俳句会。あふひ邸。

枯藪の立ちよれば粗に遠のけば

掃きしあと落葉を急ぐ大樹かな

十二月四日 武蔵野探勝会。小石川植物園。共同

印刷会社三階会議室。

うらむ気は更にあらずよ冷たき手

十二月九日 草樹会。丸ビル集会室。

草庵そうあんに 温おんじやく石いしの暖唯ただ一つ

十二月十日 句謡会。あふひ邸。

老おいはものの何か忙いそがし短みづかき日ひ

十二月十二日 笛鳴会。丸ビル集会室。

白眼に互ひなたに日向ひなたぼこりかな

十二月十二日 夜。大崎会。丸ビル集会室。

襟えりまき卷まきに深く埋うずもれかえんなん帰去来

十二月十八日 和歌山市外三田和田、かまやま竈山神社
献句式帰路車中。

山端^{やまばな}は寒し素逝^{そせい}を顧みし

十二月十九日 京都山端平八に行く。素逝、王城、
比古、年尾、紫尹と共に。

背布^{せなぶ}団狎^{どんちん}に著^きせ紐^{ひも}長く持ち

十二月二十日 京^{きょう}饌^{せん}寮。王城、比古、三千女

と共に。

金^{きん}屏^{びょう}に
ともし火の濃きところかな

十二月二十一日 「玉藻十句集（第二十三回）」

昭和十四年

初詣はつもうで 神慮は測り難けれど

願ねぎ事ごとはもとより一つ初詣

一月一日 明治神宮初詣。

雲乱れあられま霰忽ち降り来り

一月八日 武蔵野探勝会百回記念。鎌倉鶴ヶ岡八幡宮初詣。海浜院。

龍の玉たま深く蔵ぞうすといふことを

一月九日 笹鳴会。丸ビル集会室。

大だい寒かんにまけじと老たの起ち居いかな

一月十三日 草樹会。丸ビル集会室。

悴^{かじか}める手は憎しみに震へをり

一月十六日 二百二十日会。京橋、灘万。蓬矢招
宴。

花のごと流るゝ海^{のり}苔をすくひ網

一月十九日 物芽会。品川、洲崎館。

其中に境垣さかいがきあり冬木立

一月二十日 家庭俳句会。あふひ邸。

女おんな礼なれい者じやらしく古風につましく

一月二十三日 玉藻句会。丸ビル集会室。

藪やぶ入いりや母にいはねばならぬこと

一月二十五日 「玉藻十句集（第二十四回）」

石はうる人をさげすみ 寒かん鴉がらす

紅梅の旧正月の門かど辺べかな

一月二十六日 丸之内倶楽部俳句会。

寒き故我等四五人なつかしく

ゆえ

一月三十日 京都南禅寺瓢亭。いはほ招宴。いはほ、静子、王城、野風呂、雨城、のぶほ、千代子、比古。

暮れて行く枯木も加茂の御社みやしろも

一月三十一日 下鴨しもがも、糺ただすもりの森。木屋町大千賀。

王城等鹿笛同人招宴。年尾と共に。

取り乱し人に逢あはざる風邪寝かな

かほそくも打臥うちふしおはす風邪寝かな

二月六日 二百二十日会。白山招宴。銀茶寮。

冴^さえかへるそれも覚悟のことなれど

二月十日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

春の波小^{ちよと}さき石に一寸躍^{おど}り

二月十二日 日本探勝会第一回。蒲^{がまご}郡^{おり}、常磐

館にて。

茶房さぼう暗し 春しゅん灯とうは皆隠しあり

二月十四日 銀座探勝会。西銀座、レデー・タワー。
ン。

春しゅん水すいをたゞけばいたく窪くぼむなり

二月十六日 物芽会。清水谷公園、皆香園。

ついで来る人を感じて長閑のどかなり

二月十七日 家庭俳句会。本田あふひ邸。

雪の果はてこれより野山大いに笑ふ

二月十八日 発行所例会。丸ビル四階、水産倶楽部。

春水に歩みより頭ずをおさへたる

二月二十四日 鎌倉俳句会。鶴ヶ岡八幡社務所。

紅梅の京を離れて住むは厭いや

二月二十五日 「玉藻十句集（第二十五回）」

春しゅん雲うんはたなび棚たなび曳びき機婦は織り止やめず

そこを行く春の雲あり手を上げぬ

緑りよくちく竹ちくの下やそゞろに青む草

三月四日 句謡会。鎌倉、香風園。

花まばらおざさはら小笹原はらなる風の梅

三月五日 日本探勝会。
伊豆大仁、大仁温泉ホテ
ル。 蕪城会主。

たとふればすみ田の春のゆきしごと

三月九日 蚊ぶんじょう杖じょうを通じ、老年にて身まかりた
る名女将といはれし 柳やなぎばし橋 林家女将追福の通袱ふ
紗くさに句を乞こはれて。

物の芽にふりそゞぐ日をうち仰ぎ

三月十四日 夜。大崎会。丸之内倶楽部別室。

運命は笑ひ待ちをり卒業す

三月十八日 発行所例会。丸ビル四階、水産倶楽部。

春はるさむ寒もいつまでつゞく梅椿

三月二十二日 偶成。

土手の上に顔出し話す草を摘む

三月二十三日 丸之内倶楽部俳句会。

春しゅん草そうのこの道何かなつかしく

三月二十四日 鎌倉俳句会。明月院。

初蝶を夢の如くに見失ふ

三月二十九日 玉藻花鳥会。小石川植物園。

くもりたる古鏡の如し
おぼろづき
 朧月

四月四日 一江招宴。日本橋、浜田家。

黄いろなる真赤なるこの木瓜ぼけの雨

細き幹伝ひ流るゝ木瓜の雨

四月六日 二百二十日会。鎌倉浄智寺、灘万別荘。
おはん東道。

立上りしこう而して歩む春惜しむ

四月二十四日 玉藻俳句会。丸ビル四階水産倶楽部。

草餅をつまみ江こうざんはるか山遥なり

四月二十六日 「玉藻十句集（第二十七回）」

黒くろ虻あぶの尻しりの黄色しりが逆立さかだちぬ

五月六日 句謡会。鎌倉、香風園。

昔むかしこゝ六浦むつらとよばれ汐干しおひが狩かり

五月七日 日本探勝会。武州金かなざわ沢ざわ、金沢園。

道々の余花よかを眺ながめてみちのくへ

余花よかに逢あふ再び逢ひし人のごと

五月十三日 仙台俳句会兼題をおくる。

かはほりや窓の女をかすめ飛ぶ

五月十六日 青邨帰朝歓迎会。向島弘福寺。

麦飯もよし 稗飯ひえめしも辞退せず

五月十七日 丸之内倶楽部俳句会。

面つゝむ津つがる軽をとめや花林檎はなりんご

五月二十五日 風生等と共に仙台俳句会に臨み、
おたる小樽に高木一家を訪ひ、帰路大鰐に手古奈に会す。
 加賀助旅館。

代馬しろうまは大きく津軽富士小さし

五月二十六日 猿賀村、猿賀神社吟行。

みちのくの旅に覚えし薄暑かな

五月二十六日 大館おおだてを経て湯瀬温泉に至る。

夏の月かゝりて色もねずが関

五月二十七日 湯瀬出発、尾去沢おさりざわ鉾山一見、花輪に出で、瀬波温泉に向ふ。瀬波温泉にて、みづほ、素十等に会す。

浜茄子はまなすの丘あしを後にし旅つゞく

五月二十八日 村上在、瀬波温泉、三島家旅館。

ぶどうほだ
葡萄櫛ちよろ／＼燃えて夏炉かな

きせる
煙管に火つけて夏炉にかしこまる

五月二十八日 亀田、綾華居。

相語り池の浮葉もうなづきぬ

五月三十一日 紅こうろく綠上京。肋骨、鼠骨そこつと四人、
不しのばず忍、笑福亭に会す。

任重く心軽しや 更ころもがえ衣

六月二日 吉田週歩の満洲に行くを送る。

梅雨晴間打水つゆはれましある門に入る

六月八日 七宝会。近藤いぬる邸。

供^く華^げのため畦^{あぜ}に 芍^{しゃく}薬^{やく} つくるとか

六月十日 昨夜、夜汽車にて上野を発す。朝六時
 八分三日市著。直ちに黒部鉄道にて宇奈月に行く。
 延対寺泊り。蓬矢知事東道。

岩の上の大夏木の根八方に

夏山やトロに命を托しつゝ

雪溪の下にたぎれる黒部川

六月十一日 黒部峡探勝。

汝なれにやる十二単衣ひとえといふ草を

六月十一日 黒部峡探勝。つき来りし宿の婢に。

虫むし虻けらと侮うられつゝ生うを享うく

六月十六日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

遠目にはあはれとも見つ栗の花

梅つゆ雨ゆといふ暗ぺき頁ーの曆じかな

六月十七日 発行所例会。丸ビル四階、水産倶楽部。

夏風邪はなかく老に重かりき

七月一日 句謡会。鎌倉、香風園。

祖おやを守り俳諧を守り守もり武忌たけき

七月六日 朝日新聞の需もとめにより。開戦記念日を
迎ふる句のうち。

船揺れて瓶花へいか傾く涼しさよ

七月二十二日 日本探勝会。鎌倉丸乗船。ありま有馬行。
午後零時三十分出帆。

崖がけぞひの暗き小部屋こべやが涼しくて

七月二十三日 有馬温泉、兵衛旅館。

此上は比叡ひえいの座主ざすの秋を待つ

八月十四日 渋谷慈鎧じがい真如堂より 毘沙門堂びしゃもん もんぜ
跡きに榮転せられしを祝す。

打水をよろめきよけて 病やまい犬いぬ

九月二日（二百十日） 句謡会。鎌倉、香風園。

松の月暗しくとくつわむし轡虫

九月八日 草樹会。丸之内倶楽部別室。

秋風やうかとしてゐし一大事

九月十二日 二百二十日会。清水谷、皆香園。

秋風は芙蓉ふようの花にやゝあらく

九月十三日 七宝会。市公園となりし百花園。

見苦しや残る暑さの久しきは

三日月のほやかにして情なさけあり

九月十五日 大崎会。丸之内倶楽部特別室。

老おいまつ松まつの己おのれの露れを浴ぬびて濡ぬれ

老松に露の命の人往来ゆきき

老松のたゞ知る昔秋の風

九月二十二日 鎌倉俳句会。戸塚在、旧東海道松

並木、老松茶屋。

母を呼ぶ娘こや高原の秋澄みて

山の日は暑しといへど秋の風

九月二十四日

蓼たてしな科高原。

山々の男振り見よか甲斐いの秋

九月二十四日 蓼科高原よりの帰路。

かき濁しくして澄める水

九月二十六日 「玉藻十句集（第三十二回）」

月も亦とゞむるすべも無かりけり
また

大空を見廻して月孤なりけり

九月二十六日 観月句会。深沢、三越倶楽部。

黄な蝶のつういと飛べば目路めじも黄に

十月七日 句謡会。鎌倉、香風園。

風知草ふうちそう女主あるじの居間いまならん

十月十日 二百二十日会。赤坂新坂、吉田旅館。

たかあしの膳ぜんに菓子盛り紅葉寺もみじでら

坂少し下りて 中ちゆうどう堂薄紅葉

十月十五日 日本探勝会。比叡山本坊貴賓室にて。

秋雨や刻々暮るゝ琵琶びわの湖うみ

十月十六日

琵琶湖ホテルにて。

木もく権げ会。

鳩にがおゐて鳩の海とは昔より

十月十七日

琵琶湖ホテル滞在。

淋しさの故に清水に名をもつけ

十月十七日 幻住庵句会。大津ホトトギス会主催。

思ひ侘^わび此夜寒しと寝まりけり

夜寒さを侘^わびてはなひる許^{ばか}りなり

十月二十三日 「玉藻十句集（第三十三回）」

野を浅くわたりし裾すそに草じらみ

老ぬればあたゝめ酒も猪口一つ

十月二十三日 玉藻俳句会。丸之内倶楽部日本間。

秋風やとある女の或ある運命さだめ

十月二十四日 銀座探勝会。松屋裏、煉瓦れんが亭。

朝あさ鴉もずに掃除夕鴉に掃除かな

十月二十六日 物芽会。上野、梅川亭。

歴史悲し人の訃ふ悲し秋の雨

十月二十六日 『けいとうじん鶏頭陣』に菊山たねお当年男の寿貞
 尼の話を読みて悲し。王城の訃到る亦悲し。

水際みぎわなる蘆あしの一葉も紅葉せり

十月二十七日 鎌倉俳句会。百二十回。片瀬河畔
逍遙しやうよう。まさを居。

君と共によんじゆうねん四十年の秋を見し

十一月二日 王城追悼。

よき衣きぬによろこびつける 草くさ虱しらみ

行く人を待ちてとびつく草虱

十一月六日 玉藻吟行会。鎌倉松ヶ丘、東慶寺。

明治節大帝日びより和かしこしや

十一月十日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

柴漬ふしづけにまこと消ぬけべき小魚こうおかな

十一月十三日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

雨の柚子ゆずとるとて妹いもの姉かぶり

十一月十四日 玉藻例会。日本橋、高島屋。

麦むぎ蒔まきやいつまで休む老一人

しまひまで見ずに廻かいじょう状年の暮

十一月十七日 大崎会。丸之内倶楽部特別室。

屏風屋びょうぶやの上あがりかまちに老の客

十一月二十二日 丸之内倶楽部俳句会。

日と月をかゝげ目出度し明の春
めでた
あけ

十一月二十五日 偶成。

手毬唄かなしきことをうつくしく
てまりうた

十二月一日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

うかくくと咲き出でしこの帰り花

後ろにもうつれる人や
初はつかがみ鏡

十二月二日 句謡会。鎌倉、香風園。

老しづかなるは二日も同じこと

梳すきぞめまなじりや眦まなじりをつと引きゆがめ

十二月六日 玉藻吟行会。高島屋特別室。

一 いつこ壺あり はまや破魔矢をさすにところを得

十二月七日 二百二十日会。田中家、ようじん漾人主催。

見送りし仕事の山や年の暮

十二月十四日 七宝会。芝、紅葉館。水竹居主催。

枯草なほに尚おさま／＼の姿あり

高々と枯おほれ了すせたる芒すかな

もの皆の枯るゝ見に来よ百花園

十二月十六日 家庭俳句会。蕪城・椎花古稀祝。

百花園、千歳。

そこにあるありあふものを
頬ほお被かむり

十二月十九日 銀座探勝会。西銀座六丁目、滝山
ビル、餅喜汁粉屋。

この後の一百年や国の春

十二月十九日 紀元二千六百年。

砂よけの垣あり冬木皆かしぎ

十二月二十二日 鎌倉俳句会。海浜院。

向きくくに羽子はねついてゐる広場かな

羽子はごいた板を口にあてつゝ人を呼ぶ

十二月二十三日 日本橋中洲、福井筒。吉村太一
主催。

親心静に落葉見てをりて

某日 深川正一郎曹長を通じて、傷兵達に俳句を
奨励する善通寺陸軍病院長坪倉大佐へ。

霜の楯^{たて}月の劍^{つるぎ}に句を守る

十二月二十七日 小田黒潮中佐歓迎会。丸之内倶
楽部日本間。

冬ふゆごもり籠書齋の天地狭からず

炭すみとり斗や個中の天地おのずか自ら

十二月二十八日 丸之内倶楽部俳句会忘年会。京
橋、万安。

湯婆ゆたんぼの一温何にたとふべき

一日もおろそかならず古曆

十二月二十九日 玉藻忘年会。鎌倉、香風園。

大扉おおとびら今しまりけり除夜詣じよやもうで

十二月三十一日 除夜詣。浅草観音。江の島料理
のだや。

昭和十五年

初乗ゆいや由井なぎさこまなの渚を駒並めて

一月一日

厳おごそかに注連しめの内てふ言葉あり

凍いてつち土つちにつまづきがちの老の冬

羽子板を犬啞くわへ来し芝生しばふかな

一月八日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

大寒だいかんの埃ほこりの如く人死ぬる

大寒や見舞に行けば死んでをり

悴かじかめる手上げて人を打たんとす

悴める手上げて見て垂たらしけり

一月九日 さみだれ会。日本橋倶楽部。

福寿草遺産といふは蔵書のみ

松過ぎの又も光陰矢の如く

一月十日 玉藻俳句会。高島屋特別室。

万才まんざいの佇たたずみ見るは紙芝居

一月十一日 七宝会。近藤いぬる邸。

寒といふ字に金きんせき石ひびきの響あり

大寒といふといへどもすめらみくに

寒真まなか中高々として産あれし声

悴かじかめる手にさし上げぬ火酒の杯

一月十二日 草樹会。学士会館。

まろびたる娘こより転ころがる手毬てまりかな

万才えほうみちのうしろ姿も恵方道

なりふりもかまはずなりて著きど膨ふくれて

雑踏まちや街の柳は枯れたれど

一月十三日 二百二十日会。銀茶寮。

照り曇り心のまゝの冬日和

一月十五日 玉藻吟行会。麴町永田町、真下宅。

布団干しながらとまぶね 船出るところ

一月十七日 物芽会。品川、洲崎館。

福引に一国を引当てんかな

一月十八日 家庭俳句会。丸之内倶楽部日本間。

春場所の其横綱そのの男ぶり

一月十九日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

日についてめぐれる月や水仙花

一月二十三日 「玉藻十句集（第三十六回）」

避寒して世を逃のがるゝに似たるかな

一月二十五日 丸之内俱樂部俳句会。

水仙に春待つ心定まりぬ

一月二十六日 鎌倉俳句会。海浜院。

鎌倉に
実朝さねともぎあり美しき

寿福寺はおくつきどころ実朝忌

実朝忌ゆい由井なみの浪おと音おと今も高し

二月三日 句謡会。鎌倉、香風園。

又こゝに猫の恋路ときゝながし

二月九日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

桜餅女の会はつゝましく

二月十日 二百二十日会。麴町永田町二丁目、真
下宅。

子を抱いて老いたるあま蚕や猫柳

二月十二日 笹鳴会。丸之内倶楽部日本間。

ものゝ芽や仕事は常に運びある

二月十六日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

尼寺に小句会あり
鳴雪忌めいせつき

二月二十日 銀座探勝会。松屋裏、尼寺。

桜餅籠かご無造作に新しき

二月二十一日 物芽会。銀座八丁目、キユーペル。

おほどかに日ひを遮さへぎりぬ春の雲

二月二十三日 鎌倉俳句会。たかし庵。

春しゅん雪せつのひんぷん續つ紛ふんとして舞まふを見よ

三月一日 家庭俳句会。丸之内倶楽部日本間。

語りつゝ歩々紅梅に歩み寄る

紅梅を折りて挿^{はさ}めばねびまさる

春^{しゅん}宵^{しやう}の此一刻を惜むべし

三月九日 二百二十日会。木挽町、田中家。

窓の灯の消えて綾あやなし春の泥どろ

三月十四日 「玉藻五句集（第三十八回）」

主あるじなき家ながら垣繕かきくろへり

繕つくひし垣根めぐらし隠すれ栖すむ

三月十五日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

蝶もとびふるさと人もたもとほり

四月三日 玉藻例会。高島屋特別室。

花の宿ならざるはなき都かな

病む子あり花にも一家樂しまず

四月五日 家庭俳句会。あふひ女史追悼。芝公園、
花岳院。

榾^{ほだ}火^び焚^たき呉^くるゝ女はかはりをり

四月七日 夢中に得たる句。

春眠の一句はぐくみつゝありぬ

春眠を起すすべなく見まもれり

春眠やあいたい靨たいとして白きもの

春眠の一ゑまひして美しき

四月八日 笹鳴会。丸之内倶楽部別室。

花散るや鈍からすな鴉はねの翅あたり

四月十一日 七宝会。芝公園、池の端茶店。

やゝ暑く八重の桜の日蔭よし

四月十七日 物芽会。紀尾井町、皆香園。

廻らぬは魂ぬけし風車

四月十八日 丸之内倶楽部俳句会。

ぼうたんによしず葭簣の雨はあらけなし

四月二十一日 日本探勝会。横浜三溪園。待春軒
 に小憩、観月庵にて句会。聚楽邸じゅらくてい北殿の一部臨
 春閣を見る。

夏山の谷をふさぎし寺の屋根

四月二十六日 鎌倉俳句会。海蔵寺。

妹いもが宿春の驟しゅう雨うに立ち出づる

四月二十七日 二百二十日会。築地三ノ六、築地
 会館武原たけはらはん方。

牡丹花ぼたんかの雨なやましく晴れんとす

涼しきは下品げほん下生げしょうの仏かな

五月三日 家庭俳句会。

九品くほんぶつ仏浄真寺。

ゆく春の書に対すれば古人あり

風吹いて暮春の蝶のあわたゞし

五月四日 句謡会。鎌倉、香風園。

浜砂はかなに儂はかなき夢おぐさの小草おぐさかな

五月五日 日本探勝会。小田原、齋藤香村居。

古ふるあわせ 拾しき 著きて 軽けい 暖だんにをりにけり

喧けん 騒そうの蛙かわずの声こゑの中に読む

五月八日 玉藻俳句会。高島屋三階特別室。

柏かしわもち餅もち家系い賤やしといふあらに非あらず

五月九日 七宝会。杉すぎ並なみ大宮八幡遊園地茶店。

牡丹ぼたん花かの面影くすのこし崩くずれけり

五月九日 楠目くすめ橙とう黄こう子しを悼いたむ。(五月八日午後

三時三十分逝去）。

山里や軒の菖蒲しょうぶに雲ゆきゝ

五月十日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

軽暖さや坐臥が進退も意のまゝに

五月十六日 深川正一郎歓迎句会。丸之内倶楽部

日本間。

買喰かいぐひをして来よと子に祭まつり錢ぜに

五月十七日 物芽会。
吾妻橋あづまばし俱樂部。

背の順に坐り並びぬ糸取女いととりめ

五月十七日 大崎会。
丸之内俱樂部別室。

風折々^{みぎわ}汀のあやめ吹き撓^{たわ}め

五月二十四日 鎌倉俳句会。材木座光明寺。

頭にて突き上げ^{のぞ}覗く夏^{なつのれん}暖簾

五月三十日 丸之内倶楽部俳句会。

一院の静しずかなるかな
杜かきつばた 若

六月五日 玉藻俳句会。高島屋三階特別室。

鯉の水涼しく動きどうしかな

六月九日 日本探勝会。板橋区、豊島園としまえん。

営々と蠅はえを捕りとをり 蠅捕器はえとりぎ

六月十四日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

羽拔鳥はぬけどり 卒然として駈かけりけり

六月二十七日 丸之内倶楽部俳句会。

松の雨ついくと吸ひ 蟻地獄ありじごく

六月二十九日 鎌倉俳句会。藤沢遊行寺。

父老健きうに喜雨きう又いた到る安んぜよ

喜雨到る後顧こうこの憂更うれいに無し

六月三十日 大阪放送局より戦線の将士に贈る俳句といふを徴されて。

大木の幹に纏まとひて夏の影

七月七日 東子房・小蔦結婚披露俳句会。愛宕山、
嵯峨野。

雷雲に卷かれ来きたりし小鳥かな

八月三日 富士山麓山中湖畔草廬。
そうろ

秋風の俄にわかに荒し山の庵いお

八月七日 富士山麓山中湖畔草廬。

門前の坂に名附けん秋の風

八月八日 富士山麓山中湖畔草廬。

朔^{さく}北^{ほく}の秋風に意を強うする

八月十六日 哈爾濱^{ハルビン}俳句大会に寄す。

旅の秋寢^ね間^ま著^きになりて又まとる

八月十七日 句謡会。元箱根、松坂屋。

霧の中小鳥^{しき}頻りに渡りけり

われも亦ま紅れなりとついと出いで

九月四日 玉藻例会。高島屋特別室。

徳川の三百年の夏木あり

世智せち辛がらきうき浮よ世ぼ咄なしや門かど涼すずみ

九月六日 家庭俳句会。上野、梅川亭。

秋あき雨あめやほそ／＼ながら続く会

九月七日 句謡会。鎌倉、香風園。

秋風や相黙したる汝なれと吾われ

九月九日 笹鳴会。丸之内倶楽部別室。

衰へし野分のわきに鴉からす一羽飛び

九月十八日 物芽会。百花園。

我命つゞく限りの夜長よながかな

九月二十日 「玉藻五句集（第四十四回）」

なつかしや花野に生おふる一つ松

九月二十日 大崎会。丸之内倶楽部特別室。

秋風や相逢はざるも亦よろし

九月二十四日 藤崎完より漢詩一篇を贈り来りし
に返す。山中湖畔草廬。

名をへくそかづらとぞいふ花盛り

九月二十九日 日本探勝会。上野、寛永寺。

爪^{つま}立てをして手を上げて秋高し

高原に立ちはだかりて秋高し

十月八日 二百二十日会。木挽町、灘万。奈王招待。

秋風に吹かれ白らめるおもて面かな

十月九日 玉藻俳句会。高島屋特別室。

荷船にも釣る人ありてはぜ鯨の潮

十月十一日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

芋の葉のいやく合がてん点がてん々々かな

十月十二日 句謡会。鎌倉、香風園。

刈らるゝを待つ 枯かれはぎ萩ふせいの風情かな

十月十四日 笹鳴会。丸之内倶楽部特別室。

大杉に隠れて御堂みどう秋の風

十月十九日 京都鷹ヶ峰光悦寺、王城句碑除幕式。

万竹堂にて句会。妻子を伴ふ。

秋の海荒るゝといふも少しばかり

拝謁や菊花の階を恐懼きょうくして

拝謁を賜りければ菊花の花

御船今静に進む夜長かな
みふねしずか

十月二十四日 別府亀の井を出て乗船。船中。

秋風や心激して口吃る
ども

十月三十一日 丸之内倶楽部俳句会。

秋晴や心ゆるめば曇るべし

十一月一日 家庭俳句会。丸之内倶楽部別室。

吾^わも老いぬ^{なれ}汝も老いけり^{だいこうま}大根馬

十一月八日 玉藻俳句会。渋谷^{どうげんざか}道玄坂上、二葉。

初^{はつ}時^{しぐれ}雨あるべき空を見上げつゝ

十一月八日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

金^{きん}屏^{びょう}に高^{たか}御座^{みくら}あり 出^{しゅつ}御^{ぎよ}まだ

出^{しゅつ}御^{ぎよ}今^{いま}二千六百年天高し

十一月十日 紀元二千六百年式典に参列。

老い朽ちて子供の友や大根馬

いなな
嘶いななきてよききげん機嫌なり大根馬

十一月十二日 二百二十日会。銀座六丁目、実花
宅。

大石に這はひ寄りかゝる小菊かな

十一月十四日 七宝会。向むこう島じま、百花園。

冬ぬくし老の心も華はなやぎて

十一月十六日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

供へ置きし柿たうべばやと思ひけり

十一月十九日 銀座探勝会。松屋裏、尼寺。

籠かご負ひて焚火たきび煙に現れ来

立ち昇のぼる茶碗ちやわんの湯氣ゆげの紅葉もみじ晴ばれ

よろくと棹さおがのぼりて柿はぎ挟む

十一月二十二日 鎌倉俳句会。たかし庵。

墨の線一つ走りて冬の空

雲なきに時雨しぐれを落す空が好き

十一月二十八日

丸之内倶楽部俳句会。

立ち昇る炊煙の上に帰り花

十一月二十八日

「玉藻五句集（第四十六回）」

おでんやを立ち出でしより低唱す

十二月六日 家庭俳句会。日比谷公園。

時^し雨^ぐるゝを仰げる人の眉目^{びもく}かな

十二月七日 句謡会。鎌倉、香風園。

草枯るゝ日数を眺め来りけり

十二月九日 笹鳴会。丸之内倶楽部別室。

羽搏はばたきて覚さめもやらざる浮うき寝ね鳥どり

十二月十日 二百二十日会。木挽町、田中家。

大仏に到りつきたる時雨かな

十二月十二日 七宝会。鎌倉大仏、南浦園。

夔とうとう々とうとうと昇り来りし初日かな

十二月十三日 草樹会。一ツ橋、学士会館。

マスクして我を見る目の遠くより

我が生は淋しからずや日記買ふ

かばん
 鞆さげ時雨るゝ都と見かう見

十二月十七日 銀座探勝会。東京朝日新聞社向側、
 ニユー・トウキョウ。

橋をゆく人ことごと悉く息白し

十二月十八日 物芽会。浅草山内、岡田。

年忘れ老は淋しく笑まひをり

うち笑める眉目秀でゝマスクかな

十二月二十日 大崎会。丸之内倶楽部別室。

懐^{ふところ}手^でして人込みにもまれをり

懐手して洛陽^{らくよう}の市にあり

懷手して俳諧の徒輩たり

懷手して論難に對しをり

懷手して宰相の器うつわたり

左手は無きが如くに懷手

十二月二十六日 丸之内俱樂部俳句会。赤坂永田
町二ノ七、待月荘。

さまよへる風はあれども日向ひなたぼこ

美しく耕しありぬ冬菜畑ふゆなはた

冬日濃しなべて生きとし生けるもの

十二月二十七日 鎌倉俳句会。海浜ホテル。

北風に人細り行き曲り消え

十二月三十日 東京句謡会。丸之内倶楽部日本間。

神前の落葉掃く賤相しずついで

十二月三十一日 信濃神社は宗良親王しなのをむねなが祀まつる。
奉納の句を徴さる。

伏して思ふおぼろおぼろ朧々おぼろおぼろの昔かな

十二月三十一日 霧島神社奉納句を徴さる。

伸び上り高く抛ほうりぬ 札ふだおさめ納

人顔はやうやく見えじよやもうでず除夜詣

十二月三十一日 除夜詣句会。
浅草寺境内、江
の島料理。

青空文庫情報

底本：「虚子五句集（上）〔全2冊〕」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年9月17日第1刷発行

底本の親本：「五百五十句」櫻井書店

1947（昭和22）年11月5日再版

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※「吾《わ》」と「吾《われ》」と「吾《われ》」、「汝《なんじ》」と「汝《なれ》」と「汝《なれ》」の混在は、底本通りです。

※新仮名によると思われるルビの拗音、促音は、小書きしました。
※「序」の末尾の「註」は親本の初版に存在し、再版には存在しませんが、底本通りとしました。

入力：岡村和彦

校正：酒井和郎

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

五百五十句

高浜虚子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>